総説

古医方の勃興と古義学・古文辞学・古学

——その全体像の俯瞰——

寺澤 捷年

千葉中央メディカルセンター和漢診療科, 千葉, 〒264-0017 千葉市若葉区賀曾利町1835-1

The Rise of Japanese Medical Renaissance and
New Interpretation of Confucianism in Edo Period
—An Overview of Interaction with The Two Knowledge—

Katsutoshi TERASAWA

Department of Japanese-Oriental (Kampo) Medicine, Chiba Central Medical Centre, Kasori-cho 1835, Wakaba-ku, Chiba 264-0017, Japan

Abstract

Modern Kampo medicine is mainly based on a restoration of ancient Chinese medicine which occurred in the Edo period in Japan. This historical event rose under the influence of a Confucian renaissance, resulting the exclusion of metaphysics. This report intends to clarify the correlation between these two new cultural movements, and to outline the characteristics of Kampo medicine from a historical perspective.

Key words : Ancient Chinese Prescriptions, Kampo medicine, history, Kogigaku (Studies[or Interpretation] of Ancient Confucian Classics), Studies of Ancient Rhetoric

要旨

現代・日本漢方の基盤の一つに「古医方」の思想がある。これは江戸期に中国における復古運動の影響を受けて勃興したが、同時期に起こった文芸復興運動と連動している。この儒教を中心とする革新運動の影響の下に、日本独自の展開がなされた。それは思弁性の排除であり、「親試実験」による実証性の追求であった。本稿では、「古医方」と古義学・古文辞学・古学との関連を総合的に俯瞰し、両者の関連性を明らかにした。

キーワード：古医方、漢方、歴史、古義学、古文辞学

緒言

現代・日本漢方の重要な基盤の一つに「古医方」の思想がある。この医療思想は17世紀に興った。小曾戸洋¹⁾はその淵源を元末明初の王履『医經溯洄集』に求め、方有執・喻嘉言・程應旆に連なる学説の模倣と記している。これは明確な歴史的考証であり疑問の余地はない。他方、小川鼎三²⁾はこの古医方について、「瞑想的要素の多い金元の医学を排して、『傷寒論』のような古い時代のものがいっそう実際に即しているからそれを学ぶべしとする古医方が、18世紀の日本でしだいに勢力を伸ばしてくる。その学派の人びとを古方家という。(中略) 儒学における復古派と併行していた」と述べている。

また、大塚恭男³⁾は古医方の成立について、おりから金元医学の理論的支柱となった朱子らの宋学に

対する批判として、伊藤仁斎らが「孔孟の原典に帰る」運動に興していた。これが古学派であるが、あたかも、これに呼応するかの如くに医学の上でも思弁主義的な金元医学を排して「張仲景の原典に帰る」ことが主唱されたのである、と記している。

花輪壽彦⁴⁾は「古医方」の始祖とされる名古屋玄医に関する緻密な論考において、小曾戸洋の学説を支持すると共に、古義学を確立した儒者・伊藤仁斎⁵⁾の影響を論理的に解明し、推論している。

しかし、「併行」と言われ、「呼応」と記される「古医方の勃興」と「儒学革命」との関係を、このような文脈の中でその全体像を俯瞰した報告はない。本稿はこの二つの一見異なった領域の関連性について、資料を根拠にその全体像を把握し「古医方」勃興の実態を明らかにしようとするものである。

図1

材料と方法

古義学・古文辞学の諸資料と、その学統を調査すると共に、「古医方」の確立に関わった医家の思想形成の形跡を辿った。古義学は伊藤仁斎が確立した学の体系である⁵⁾。また、古文辞学は荻生徂徠の形成した学の体系である⁶⁾。本居宣長はこの系譜に連なり『古事記伝』にその偉業を留めた（これを後に古学と言う⁷⁾。そこで、吉川幸次郎『仁斎・徂徠・宣長』⁸⁾を基本に、『伊藤仁斎・附伊藤東涯』⁵⁾、『荻生徂徠』⁶⁾、『山井崑崙・山県周南』⁹⁾、『「事件」としての徂徠学』¹⁰⁾、『本居宣長』⁷⁾、本居宣長記念館・研究

室資料¹¹⁾もこれに加え古義学・古文辞学領域の調査材料とした。

また、「古医方」については近世漢方医学書集成（名著出版）に記された医家に関する「解題」を基礎資料とした³⁾⁴⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾。

結果

全体像を俯瞰するものを図1に掲げた。この図を理解するための前提として、各々の学者の概略を列記する。なお、この図で示す記号は次のとおりである。矢印（→）は師弟関係ないしは明確な影響の授受。相方向矢印は対等な交流関係。破線矢印は明確

な根拠はないが状況証拠から十分に想定される関係である。

1. 伊藤仁斎 (1627-1705)

儒者。京都の人。初め朱子学を修め、後に古義学を確立した。古義学とは文字の意味することがらを古代に遡って理解しようとする学問で、古代中国の儒家の思想、ことに孔子のそのの演繹という形をとる学の体系である⁵⁾。

仁斎の書『童子問』に、「曰く、吾に家法なし、論語孟子の正文に就いて理会す。これ吾が家法のみ」とあるように、すべて師授によらずして、みずからによる独自の到達である。教師を要しない天才で、彼はあった。仏教と宋学から脱出して、「古義」に到達したのは、一層の独創であり、伝統からの解放である。言語学者としての天才的能力による彼の「古義学」は孔孟の思想そのままの「古義」すなわち原意の再獲得とする。仁斎は、宋儒の言うような「理」が、世界の原理として存在するということを、そもそも認めない。次項に記す徂徠は仁斎批判に廻ったが、仁斎に対する大いなる尊敬の念があったことは覆いがたい、と吉川幸次郎⁸⁾は記している。

その弟子・渡辺子固は柳沢吉保の頭脳集団の一人であり、仁斎の学説と思想を荻生徂徠と共に考えた同僚であった。

仁斎は「存在は必ず運動し、運動するもののみが存在である。天地は一活物である。宋儒が理ということを出して、理を存在の原理とするのは、根本的に誤謬である」⁵⁾として、「生々たる一元氣」を根本に据え、天道から人道を独立させ「天」を「人」は窮理できないとした。また、卑近がより重要であって、高遠なるものは虚妄であり、宋儒は卑近を忘れて高遠を求めたと明言している。花輪⁴⁾はこの「生々たる一元氣」の思想が名古屋玄医に影響を与えたと推論している。筆者は吉益東洞の『医断』・「司命」「死生」「元氣」¹⁴⁾にこの思想が受け継がれていることを指摘したい。

2. 伊藤東涯 (1670-1736)

儒者。京都の人。伊藤仁斎の長子であり、仁斎の古義学を継承したが、その研究方法論は極めて科学的でこの方法論が後の本居宣長に伝わったと理解したい。例えば「不」の一字について「不可」と「可不」、「必不」と「不必」、「不亦」と「亦不」の相違を六経を中心に文献中から用例を抽出・検討し結論

を得ている⁵⁾。この業績が『傷寒論』の古義に則った正確な読解に多大な影響を与えたであろう事は想像に難くない。なお、仁斎の末子・伊藤長堅は下記の香川修庵の墓碑銘の撰者¹³⁾である。

3. 荻生徂徠 (1666-1728)

儒者。江戸の人。初め朱子学を学び、のち古文辞学を提唱。古文辞学とは古語の意義の帰納的研究によって先秦古典の本旨を知ろうとする訓詁学である。徂徠によれば、全ての存在は運動を属性とする。人間も自然も「活物」だからである⁶⁾⁸⁾。「六経」による「先王の道」の獲得は、「先王の道」が「六経」の言語そのもののの中に存在することを重視せねばならぬ。何となれば、「六経」の言語は、事実のみを尊重し、議論を排斥する。「先王の道」の生んだ言語であるゆえに、その言語の文体もまた、事実と密着する修辞法によって書かれている。それは古代人のもったすぐれた修辞法である。それを「古文辞」と呼ぶ、と。

「古文辞学」の方法によれば、漢秦の原典をその原形を、そのまま直接に把握できるとの認識であり、これに注釈を加えることは、単に不用であるばかりでなく、反価値的な存在であり、原典の破壊であるとする思考に到った。「古文辞」のみならず古代の事実は、後代に分裂した事実の全てを含蓄する。ゆえにまず根本である「古」をしっかり把握せよ、との主張である⁶⁾。結論的に言えば、一切の「理」(恣意性)の排除であり、「あるがまま」を見据えよとの主張である。

此のやや難解な「古文辞学」を筆者の理解なりに例示してみたい。松尾芭蕉『奥の細道』の俳句に「五月雨を あつめてはやし 最上川」がある。これを宋学的に解釈すると「五月、正に陽気燃え盛ろうとする時節。そこに雨が降る。五行の理では水は木の母という。木々も燃え盛るであろう。これが理である。この陽気と最上川という陰液との躍動的な調和をこの句は見事に捕らえている」となる。徂徠は「この解説は全然、本質が分かっていない、このような解説は無い方がましだ」と言うのである。そして、この句のポイントは初夏の最上川の大自然のありさまを五・七・五に凝集して描写したもので、「緊張感と音韻の美しさ」その言葉に揺るぎはない。自らそこに船人となり、蕩々たる最上川の流れと一体となり「あつめてはやし」の七文字が出た。この実感

を「ありのまま」に味わえば良いのだ、そこに我々は初めて「芭蕉の澄み渡った心を共感できる」としたのである。

医学に関連する事項では、徂徠は実体として「陰陽」があるとは言っていない。それを枠組みとすることで、より有効に天地自然にむきあうことが出来るように聖人が立てたものなのである。必ずしもそうであらねばならないということではなく、万物をカテゴリーに分けるための術なのである、と述べている⁷⁾。しかも、「忠も孝もない」。そもそも「忠」とは何か、それは仕えるに値する主君が在ってこそ話である。「孝」とは何か、それは孝養を尽くすに値する父母が在っての話であるとの主張である。このような徂徠の思想は日本的朱子学を根底から破壊するものであり、朱子学を官学と位置付けようとする当時の幕藩体制にとってはまさに「事件」であった¹⁰⁾。

4. 山県周南 (1687-1752)

儒学者。周防の人。19歳で江戸の荻生徂徠に入門。3年間の修学の後、萩に帰省。その後も書簡などで頻繁に徂徠の薫陶を受けた。藩校・明倫館の創設に尽力し、二代目・学頭となる。江戸幕府が朱子学を官学としていた状況で徂徠学を採用した毛利藩の心意気が伝わる史実である。周南は最晩年に京都の吉益東洞を受診している⁹⁾¹⁵⁾。周南の伝記によれば「京都の名医を受診することと成った」とだけ記されている⁹⁾。なぜ吉益東洞であったかは今後の資料の発見に待ちたいが、堀景山の仲介である可能性が大きいと筆者は推測している。

5. 本居宣長 (1730-1801)

伊勢・松坂の儒医・国学者⁶⁾。1738年、「吉益東洞、堀景山を頼って上京」⁷⁾したとある。しかし、宣長が27歳頃に記した『送藤文興還肥後序』¹⁸⁾を見ると、古医方に批判的であることから、吉益東洞、或いは香川修庵に師事したものの、結果的に後世方をより好ましいものと評価している。これは宣長にとって「古医方」が余りに過激な医療思想であったことを意味する。このことから宣長の医学の師は最終的に後世派の武川幸順 (1725-1780) であったとする記述に妥当性があると考えたい⁷⁾。

それにも拘わらず、「古学」の分野における宣長の学問、それは極めて論理性の高い言語学的検証を基盤とした実証主義である。私見ながらこの方法論

における堀景山の影響は覆うべくもない。宣長の著書『うひの山ぶみ』の定義によれば、「何事も古書によりて、その本を考へ上代の事をつまびらかに明らむる学問」である。つまり歴史事実をそのまま再認識せんとする学問である。その為には、一切の恣意は排斥されねばならぬ。そして認識の基礎としては、最も確実なものがもとめられねばならぬ。そして宣長が、その基礎として求めたもの、それは実に、古人の言語であった⁷⁾。宣長の主張を筆者なりに要約すると「言 (コトバ・音声)・事 (ワザ・文字表現)・心 (ココロ) は別物であって、ココロがワザを借りてコトバとなっている。ワザに振り回されてはならない。たいせつなのはコトバからのぞけるココロそのものだ」と言えそうである。

6. 堀 景山 (1688-1757)

儒者・儒医。京都の人。曾祖父は藤原惺窩門人の堀杏庵で、父は儒学者・医師の堀玄達。当初、父から受け継いだ朱子学者であったが、荻生徂徠に私淑。古義学・古文辞学・国学にも精通し、契沖の著書『百人一首改観抄』の刊行に尽力した。本居宣長は晩年の弟子で、堀景山をとおして徂徠の学問を知り、また契沖の著書に接して、和歌をはじめ古典文学への目を開かれたという⁷⁾。図1に示すように、堀景山は古義学・古文辞学と医学の仲介役としての重要人物である。吉益東洞が同郷の堀景山を頼って上洛したことは呉秀三¹⁵⁾『東洞全集』の「吉益東洞先生」に見られる記述であるが、その「後ろ楯」であったことは今回の調査で明らかになった特筆すべき事項である¹¹⁾。

7. 渡辺子固

伊藤仁斎の弟子。生没年不詳。徂徠と共に柳沢吉保の頭脳集団として活躍。徂徠は子固を通じて仁斎の思想を詳細に知った。この因縁で徂徠は仁斎に質問状を送ったが、返信は無かった。その理由は仁斎が病床に伏し、返事がしたためられない危篤な状態にあったからである。しかし、その仁斎の学徳を賞賛することから始まる書状が、徂徠の許可なく遺稿集に掲載されたため徂徠は激怒したと伝えられている⁶⁾⁸⁾。

8. 名古屋玄医 (1628-1696)

古医方の先駆者。京都の人。花輪壽彦¹⁰⁾による詳細な論考がある。ここに大問題がある。玄医が何故、突然に「古医方」を発想したのであろうか。これは

小曾戸¹⁾、花輪⁴⁾の指摘するように、中国における復古運動の影響と考えて良い。それは『傷寒論』の再評価の運動であった。『医経溯洄集抄』の出版(1663年)はその証左である。その模倣の確信は臨床の現場で得られた。目前の急性感染症への対処において『傷寒論』の真価を身を以て体験したからに他ならない。突然の悪寒・高熱で脳症を起こし、呼吸困難を来している患者は補中益気湯、滋陰降火湯、十全大補湯では到底救えない。『傷寒論』の大青龍湯、大承気湯でなければ救命出来ないのだ。此において、金元学派の論理は現実的に破綻するのである。この臨床の現実を「直視」出来たところに玄医の偉大さがあった。「親試実験」の境涯である。私は一人の臨床家としてそう考えたい。その復古の重要性を確信した正にその時、仁斎の「生々たる一元氣」に出会ったのである。花輪⁴⁾が解明したように、両者の生年と年譜の対比からも筆者の分析の妥当性は十分に担保されると考える。この文脈において小川鼎三²⁾の言う「併行」は妥当である。

9. 後藤艮山 (1659-1733)

儒医、江戸の人。「一気留滞説」の提唱者。大塚恭男³⁾の詳細な論考がある。大塚の記述は実に明快である。「艮山は江戸中期に興った医学革新運動の先駆者であった。ただし、古方派という呼称はかれの門人である香川修庵や山脇東洋らの代になってはじめて自覚をもって使われたのであって、艮山自身には革新の鼻祖というような大形の構えは全くみとめられない」と。

古義学の視点から探ると、「儒者となっても伊藤仁斎以上になることは難しい、僧となっても隠元をぬきこんでいることは難しいと嘆じたすえに医学の道を選んだ」という逸話³⁾は重要であろう。仁斎の偉大さを既に認識していた証左である。

次項に記す香川修庵は艮山に師事する前に仁斎の門弟であった可能性が高い¹³⁾。艮山と修庵の関係も単に師弟とは判じがたい天才同士である。しかし、世の常として、反発するに値する師匠がいればこそ革新の気運が生まれるのである。山脇東洋、香川修庵という傑物を生み出した艮山の業績は不滅であると考えたい。

10. 香川修庵 (1683-1755)

播磨・姫路の人。上洛して伊藤仁斎の門人となり、後に後藤艮山に師事。聖道と医術は、その本は一で

あって二ではない(儒医一本)と主張。学堂を「一本堂」と名付けた。著書に『一本堂行余医言』など。山田光胤¹³⁾の詳細な論考がある。修庵が先に後藤艮山に師事したか、仁斎に師事したかは学説が分かれるが、筆者は山田光胤の記述¹³⁾を支持したい。儒学を先に学び、次いで医学を学ぶのは江戸期の普遍的な手順であったからである。なお、香川修庵の「儒医一本」については町泉寿郎の優れた論考がある¹⁷⁾。最晩年の弟子に本居宣長がいることが今回の調査で明らかになった⁷⁾。

11. 山脇東洋 (1705-1762)

丹波・亀山の人。後藤艮山に師事。1729年に法眼となる。1746年『外台秘要法』を復刻。1756年に国内初の解剖書『蔵志』を刊行。大塚恭男³⁾による詳細な論考がある。吉益東洞を引き上げた逸話は後世に記されたが、真実に近いもののようである¹⁷⁾。吉益東洞の伝記によれば、東洞とは終生勉学を共にしたとある²¹⁾。なお、『外台秘要』の復刻を巡っては、町泉寿郎の詳細な論考がある¹⁶⁾。

実証主義精神を貫き我が国で初めての人体解剖(1754年)を実行。その成果は『蔵志』として刊行された(1759年)。その際に参照した解剖学書はオランダ語に翻訳された「警須林牛蘇」J. ヘスリング Johannes Vesling (1514-1564)の著したものであったとされている³⁾。杉本つとむ²²⁾はその著『江戸の阿蘭陀流医師』で山脇東洋の真正の学者としての姿勢を高く評価し、杉田玄白の欺瞞性を指摘している。

12. 松原一閑齋 (1689-1765)

長門・阿武郡の医人。京都で古医方を実践。浅田宗伯の『皇国名医伝』に名古屋玄医、後藤艮山、山脇東洋と共に、古方の四大家と称されている²³⁾。呉秀三²⁵⁾によれば「師授を受けることなく、王守仁(王陽明)(1472-1529)の学を信じ張仲景を宗とし、李朱後世の妄説を排撃し一家を為した」と記されている。吉益東洞と共に『傷寒論』を研究したが、意見が合わず、この勉強会は程なく中止となったことが、東洞の伝記から読み取れる²¹⁾。小曾戸¹⁾の言う「中国復古主義の模倣」の基本的対峙の姿勢の相違、それは思想的コンタミネーションを受容するか否か、その極限的思想闘争の姿をここに見ることができる。一閑齋の限界、それは筆者にも突き付けられた宿題である。

13. 吉益東洞 (1702–1773)

古医方の大成者。広島の人。上洛し古医方を実践したとあるが、師授を受けたとは記されていない。松原一閑齋と同様に「中国復古主義の模倣」から出発したと考えられる。彼の「古医方」は当初、世に受け入れられず不遇であったが、ある患者の処方契機に山脇東洋にその力量を評価された。東洋の引き立てを得るまでの学問的活動について伝記は空白であるが、今回の調査で儒者・堀景山に出会ったことが判明した。この沈伏の時代に仁斎、徂徠の思想を学んでいたわけで、その後の東洞学説の急速な展開にはその前提があったのである。東洋とはその後、『傷寒論』を山脇東洋、松原一閑齋と共に研究したが、一閑齋とは袖を分かった。そして『春秋左氏伝』を東洋や儒者と共に終生に亘り学んだという²¹⁾。

著書に『類聚方』(1752年)、『方極』(1755年)、『葉微』(1785年)などがあるが、これらの著作の研究法論は仁斎、徂徠のそれに酷似している。

東洞はまた、全ての病気の原因は一つの毒によるとする「万病一毒説」を唱えた。その確信の背後には仁斎、徂徠の思想が大きく関与したと結論づけた。

なお、吉益東洞の「万病一毒説」と後藤艮山の「一気留滞説」の関連については花輪壽彦の優れた論考がある²⁶⁾。

考察

江戸期にあって儒学を学ぶことは医師を目指す者のみならず、庶民に到るまで、言わば一般教養として存在した。好学の徳川家康は藤原惺窩の学識に傾倒し、その弟子・林羅山を重用した。朱子学から特に「忠孝」を抽出し、幕藩体制維持のための思想的支柱として日本的儒学を奨励したのである。これが幕府の官学となったのは綱吉、吉宗の時代であり、湯島聖堂(1690年)の創建は官学の樹立にとって象徴的な出来事であった。

この歪んだ日本的朱子学を批判した山鹿素行(1622–1685)は『聖教要録』を著し、幕府の怒りをうけ、播州・赤穂に配流された²⁷⁾。この事件とほぼ同時期に伊藤仁斎は生きた。賢明な仁斎は朱子学を正面から排除せずに「その本義を説きあかす」という姿勢によって、反体制の学の領域を獲得することに成功したのである。医学の面でも実は同様の姿

勢が花輪⁴⁾によって指摘されている。すなわち、医学の本流であった曲直瀬流(金元学派)を破壊し排除するのではなく、それをも受容する形の中で、名古屋玄医、後藤艮山らは医学革新を粛々と進めたのである。

伊藤仁斎と名古屋玄医との関係について、花輪⁴⁾は慎重な推論をしている。『管子』に「思之、思之、又重思之、思之而不通鬼、神将通之、非鬼神力也、精気之極也」²⁰⁾がある。玄医が既存の思弁的医学(李朱医学)と『傷寒論』医学との本質的な思想の相違とは何か、という大疑問に直面した正にその時、天啓のように仁斎の生命論のひとことが届いたのではなかろうか。歴史的資料の出現を待ちたい。この文脈において小川鼎三²⁾の言う「併行」の語は妥当であると考えられる。

荻生徂徠⁵⁾⁸⁾の人生も極めて複雑・多難である。医師であった父親の「江戸払い」によって14歳~25歳(一説に27歳)を上総・本納村(千葉県・茂原市)と横地下村(千葉県・山武市成東町)で過ごした。この際の支援者が円頓寺(真言宗)の僧・覚眼であった。徂徠はこの僧から『四庫大全』を借りて読破している。そして、この時代に徂徠は伊藤仁斎の文名に耳を傾け、仁斎の学問に並々ならぬ関心を懐いている。

江戸に戻ることを許された徂徠は芝・増上寺門前に家塾を開き古文辞学を展開した。1698年には柳沢吉保の頭脳集団に加わった。時の将軍・綱吉の推挙があったとされているが、徂徠父子を江戸払いにしたのは当時、館林藩主であった綱吉である。しかも綱吉は朱子学を官学として確立しようとしていた。徂徠の複雑な心中は察して余りがある。革新的思想を心中に固く懐き、あえて行政の中枢部へと乗り込んだのである。その体制の中であって(後に官を辞して家塾を開いたが)自己の学の体系の確立に成功した。これを傑物と言わずに何と言おう。

ところで、徂徠の弟子・堀景山の果たした役割をみると、そこには大塚恭男³⁾の言う「呼応」の姿が見える。一見すると別個の領域である古義学・古文辞学と古医方が堀景山の仲介によって呼応しているのである。

別個な「学」の領域であるとは言え、古義学・古文辞学が「生命論」を唱える以上、医学と無関係ではありえない。これを先鋭的に指摘したのが香川修

庵の「儒医一本」の思想である。

ここで特に指摘しなければならない事柄は「天」についてである。上述したように、徂徠が「天」は「活物」だと言うとき、少なくともここでの含意は、「天」が人間の側からの「窮理」という営為を越えた存在であるということである。奥深いことには、こういう感覚は伊藤仁斎のものであったということである⁸⁾。

図1に示した革新運動を成し遂げた様々な人々の学問形成の過程を見ると、一つの共通項が浮かびあがる。それは既存の価値観に疑問を持ち、極めて論理的・実証的な手法によって、思弁性・恣意性を排して「生命の本質」に迫ろうとした態度である。その態度は必ずしも師授には依っていない。古医方について言えば、中国医学の影響を受けたであろうし、また西洋医学の影響も受けたであろう。しかし、その前提として彼らの天才的とも言える洞察力と抜群の臨床観察能力があったのである。『傷寒論』は臨床に試みて確かに有効であること、その「親試実験」こそが彼らにとっての根源的な原動力であった。

小曾戸洋の言う「模倣」¹⁾の意味は深い。この『傷寒論』に帰れという模倣こそが臨床の「親試実験」とおして日本・漢方を形成した。ところが中国本土では復古主義はその後どのような経過をたどったであろうか。結局はこの実証的思考は李朱医学の伝統の中に埋没してしまったのである。ここに現代・「中医学」が本質的に「日本・漢方」とは別の知の体系になっている根源がある。

結論

このように冷静に相互関係を俯瞰すると、古医方の成立が中国の復古学の模倣であったとする小曾戸の論証を改めて確認できた。そして古義学・古文辞学との関係は時に「併行」であり、時に「呼応」であり、見方を変えれば「同時多発的事象」であったとも考えられるのである。

臨床家である筆者に言わせれば、現場で直面する「傷寒」には補中益気湯や滋陰降火湯、ましてや十全大補湯では対処できない。何としてでも『傷寒論』の知恵を借りなければならなかったのである。その基本的治療理念の根拠を古義学・古文辞学に求め、思弁性を排除し、あるがままの病態（証）に適當する方剤を対応させる「方証相對」の方法論を再認識したのである。思弁性排除の姿勢は吉益東洞に到っ

ては「陰陽」「六病位」も括弧で括るというところまで到達した。それが「古医方」であった。そして「親試実験」によってこの理念を先鋭化し、演繹的に万病に敷衍する方法を見いだした。これが模倣を脱して日本独自の「古医方」の展開が為された歴史的経過であったと考えたい。

しかし誤解の無いように蛇足を記せば、筆者は本稿によって日本漢方の独自性のみを強調する意図は全くない。「これで有らねばならぬ」と述べたものでもない。様々な関係性の中において多様な考え方が育まれたこと、そして先人は「斯く深く考えた」という事実だけを尊敬の念を持って述べたものである。

謝辞：松原一閑齋、中国の復古主義については北里大学・東洋医学総合研究所・医史学研究部の小曾戸洋部長のご助力を得た。またベスリング解剖書については畏友・鳥海征次氏（高校同級生）の助力を得た。記して感謝の意を表する。

参考文献

- 1) 小曾戸洋：漢方の歴史，大修館書店，1999
- 2) 小川鼎三：医学の歴史，中央公論社，1984
- 3) 大塚恭男：大塚敬節・矢数道明編，近世漢方医学書集成13・後藤良山・山脇東洋・解題，名著出版，1979
- 4) 花輪壽彦：大塚敬節・矢数道明編：近世漢方医学書集成102・名古屋玄医・解題，名著出版，1984
- 5) 伊東倫厚：伊藤仁斎・附伊藤東涯，明德出版社，1983
- 6) 田尻祐一郎：荻生徂徠，日本の思想家⑮，明德出版，2008
- 7) 子安宣邦：本居宣長，岩波書店，2001
- 8) 吉川幸次郎：仁斎・徂徠・宣長，岩波書店，1975
- 9) 藤井明・久富木成大：山井崑崙・山県周南，明德出版社，1988
- 10) 子安宣邦：「事件」としての徂徠学，青土社，1990
- 11) 本居宣長記念館資料：<http://norinagakinenkan.com/>
- 12) 大塚敬節：大塚敬節・矢数道明編：近世漢方医学書集成10・吉益東洞・解題，名著出版，1985
- 13) 山田光胤：近世漢方医学書集成65・香川修庵・解題，名著出版，1982
- 14) 大塚敬節：大塚敬節・矢数道明編：近世漢方医学書集成12・吉益東洞・『医断』，名著出版，1980
- 15) 呉秀三・富士川游校定：東洞全集（復刻版），思文閣出版，1980
- 16) 町泉寿郎：香川修庵の儒医一本の儒について，日本医史学雑誌，44，1988
- 17) 町泉寿郎：山脇東洋と徂徠学派，日本中國学会報，50，1998
- 18) 木下秀人：宣長の医学論—送藤文興還肥後序，2003

<http://members.jcom.home.ne.jp/hkino/file 3-5.htm>

- 20) 遠藤哲夫：『管子』中『新釈漢文大系』43, 明治書院, 1992
- 21) 和田啓十郎：医界之鉄椎（復刻版）・吉益東洞伝, 中国漢方医学書刊行会, 1971
- 22) 杉本つとむ：江戸の阿蘭陀流医師, 早稲田大学出版会, 2004
- 23) 小曾戸洋：日本大百科全書, 小学館, 1994
- 24) 小曾戸洋：朝日日本人物辞典・松原一閑齋, 朝日新聞社, 2008
- 25) 呉秀三：呉秀三著作集 1 /医史学篇, 思文閣出版, 1982
- 26) 花輪壽彦：「一気留滞説」と「万病一毒説」について, 漢方の臨床, 30(10), 1983
- 27) 新村出編：広辞苑（第6版）, 岩波書店, 2008